Tohto University

Literature review on the effects of audio-visual educational materials for understanding the elderly

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三島, 富有, 鈴木, 晶子, SUZUKI, Akiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.50818/00000111

©東都大学2022

【資料】

高齢者理解のための視聴覚教材の効果に関する文献検討

Literature review on the effects of audio-visual educational materials for understanding the elderly

三島　富有[1)]　　鈴木　晶子[2)]
Fuyu MISHIMA　Akiko SUZUKI

要　旨

高齢者看護学は，ライフステージが最終段階にある方が対象であり，たどってきた人生の背景，高齢者の多様性および取り巻く環境の理解が重要である．COVID-19の蔓延に伴い，実習方法を変更する状況となっている．その代替措置として，視聴覚教材を使用することで高齢者理解にどのような効果があるかを検討した．その結果，調査対象の文献から【統合的な理解促進】【身近な存在として認識】【高齢者を取り巻く環境の理解】【視聴覚教材活用のメリット】の4つのカテゴリーに分類された．≪老年観の深まり≫≪認知症高齢者へのイメージ≫≪高齢者への興味・関心≫≪身近な存在≫≪高齢者介護の現状理解≫≪練習効果≫≪場面の焦点化≫などのサブカテゴリーに分類された．視聴覚教材活用は，教員のねらいや活用の工夫によって高齢者理解を促進することが示唆された．

キーワード：看護教育，高齢者，理解，視聴覚教材

Ⅰ．はじめに

高齢者看護学は，ライフステージの最終段階にある方が対象である．太田[1)]は，高齢者の生活全体を捉えるための視点として「独自の，2つとない生き方をしてきた歴史をもつ」「自立と依存のバランス状態にある」「徐々に機能衰退するプロセスにある」「生命へ向き合う」「その人なりの人生の統合を行う」の5点を提示している．高齢者看護を担う者の多くは，発達段階で老年期を未だ経験したことはない．それだけに，高齢者の方々がたどってきた人生の背景，高齢者の多様性，高齢者を取り巻く環境の理解が重要である．

2019年12月に発生したCOVID-19の蔓延に伴い，看護教育で必要不可欠である臨地実習に制限が発生し実習方法を変更する状況が続いている．看護における教育機関では，学生の学びを保証するための演習及び学内実習を実施し，必要な知識・技術の習得に努めてきた．文部科学省[2)]は，平成29．30．31年改訂学習指導要領にて，「主体的・対話的，深い学び」にたった授業改善を行うこと，学校教育における質の高い学びを実現し，学習内容を深く理解し，資質・能力を身に付け，生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすることを推奨している．

辻[3)]は「現実的な場面の提示ができる」教育効果として視聴覚メディア教材があると述べている．また，阿部[4)]は，映像教材は人間の感性，感情に訴えることを得意とする「百聞は一見にしかず」というような多量の情報を瞬時に伝達する力もある，と述べている．映像教材の効果である「現実的な場面の提示「人間の感性，感情への訴え」「多量の情報を瞬時に伝達」を活用することにより，実際の高齢者の方と対面で接する機会は持てなくとも，臨地実習の代替措置の1つとなるのではないかと考える．

本研究は，視聴覚教材の活用状況及び，視聴覚教材の分類と視聴時期を概観すること．さらに，看護学生に対し，視聴覚教材を使用することで，高齢者理解にどのような効果があるか検討することを目的とした．

Ⅱ．方法

1．用語の定義

視聴覚教材とは，映画，放送，VTR，映像CD，DVD等とする．[5)]

1) 東都大学 沼津ヒューマンケア学部 看護学科
2) 日本医療科学大学 保健医療学部 看護学科
E-mail：fuyu.mishima@tohto.ac.jp

表1　対象文献一覧

	発表年	文献名	著者名	使用教材	掲載誌名
1	1993	老人理解の学習効果―テレビドラマを用いて―	馬場口他	放送（TVドラマ）	京府医大短紀要
2	2005	視聴覚教材による看護学生の高齢者の日常の捉え方 ―視聴後レポートの内容分析から―	根岸他	VTR（筆者らが作成）	老年看護
3	2007	高齢者理解を広げる映画教材の教育効果	古城他	映画「コクーン」 1985年日本上映	新見公立短期大学紀要
4	2011	高齢者を理解するための自作視聴覚教材に対する学生の反応	安川他	DVD（筆者らが作成）	札幌医科大学 保健医療学部紀要
5	2013	認知症高齢者を理解するためのビデオ教材の効果	久木原他	映画「折梅」(2002年上映)	インターナショナル nursing care research
6	2013	老年看護学演習における視聴覚教材活用の効果	葛原他	DVD（筆者らが作成）	産業医科大学誌
7	2014	生活機能に焦点をあてた認知症高齢者の視聴覚教材の作成と 看護過程演習への活用に向けての課題の検討	木島他	DVD（筆者らが作成）	札幌保健科学雑誌
8	2015	看護学生の高齢者理解のための視聴覚教材の評価： 生活史インタビューで構成した試作教材の有用性	浅井他	DVD（筆者らが作成）	獨協医科大学 看護学部紀要
9	2020	高齢者の終末期医療や老衰死についての看護学生の認識	長尾他	放送（ドキュメンタリー）	老年看護学

2．文献検索方法

対象文献の検索は，コンピューターベースの検索で行った．2022年4月21日に，医中誌，CiNiiのデータベースにて「看護教育」「視聴覚教材」「高齢者」をキーワードとして会議録を除外し検索した．（医中誌：52件，CiNii：2件）．検索にて得られた文献のうち重複する論文を整理し，視聴覚教材を活用していないもの，看護学生を対象としていないものを除外した．その結果，対象文献は9件だった．

3．分析方法

上記文献検索方法にそって，以下の3段階で分析を行った．

第1段階では，検索を行った結果から，対象文献の動向を概観するため，対象文献一覧を作成した．

第2段階では，視聴覚教材の分類と視聴時期を概観するため，視聴覚教材の分類・視聴時期を表にまとめた．

第3段階では，分析対象とした9文献から，高齢者理解を示す記述及び，視聴覚教材の効果を示す結果を類似性に基づき分類し，表にまとめた．

Ⅲ．結果

1．視聴覚教材の活用状況

対象文献は計9件だった．対象文献の中で最初に発表されたのが，1993年であり，2005～2015年の間で，7件の研究報告がされていた．（表1）．[6) 7) 8) 9) 19) 11) 12) 13) 14)]

2．視聴覚教材の分類と視聴時期

1）視聴覚教材の分類

対象文献9件の分類を表2にまとめた．視聴覚教材の種類は，映画が2件，放送が2件，VTRが1件，DVDが4件だった．視聴覚教材を活用した学習形態は，講義6件，演習3件，だった（表2）．

2）視聴時期

（1）講義

祖父母のライフヒストリー聴取後に映画を視聴，「認知症患者の看護」の単元で映画を視聴，「高齢者の終末期医療」の単元で放送（ドキュメンタリー）を視聴した等であった．

（2）演習

模擬患者（SP）として，生活機能障害を持つ75歳男性の事例によるコミュニケーション演習に事前学習としてeラーニングで繰り返し視聴した．老年看護学演習履修後に，認知症高齢者の日常生活から作成した映像を視聴した等だった．

3．高齢者理解への効果

分析対象とした9文献から，高齢者理解を示す記述及び，視聴覚教材の効果を示す結果を類似性に基づき分類したところ，44コードが抽出され，10個のサブカテゴリー，4個のカテゴリーに分類された．

分析結果は表3に示す．以下，カテゴリーは【】，サブカテゴリーは≪≫と示す．

表2　視聴覚教材の分類・視聴時期

種類	学習形態	著書	対象学年	目的	方法	使用教材	視聴時期
映画	講義	古城他	1年生	高齢者理解に関する教育効果を明らかにする	視聴後のレポート64編を分析した。高齢者理解に関する学びを抽出し，その内容をカテゴリー化した。	「コクーン」	祖父母のライフヒストリー（演習）後
		久木原他	2年生	ビデオ教材の教育効果を評価する	「印象に残った場面」「印象に残った理由」「認知症の特徴」「介護について」「在宅介護について」の項目のレポートの内容分析を行った。	「折梅」	老年看護学の単元「認知症患者の看護」
放送		馬場口他	2年生	対象の理解という原点に戻り，老人観を深める	「主人公の生きざまを通してどのように考えたか」を自由記載（①対象の理解②老人観③全体を通しての感想）記載内容の分析と学生の反応より学習効果の検討を行った。	老人を主人公にしたTVドラマ	老人臨床看護の授業の最終日
		長尾他	2年生	高齢者の終末期医療や老衰死についての学生の認識を明らかにする	授業後，視聴して考えたこと，高齢者の看取りに向けて看護師が果たすべき役割についてレポートを提出してもらい，内容分析を行った。	NHKスペシャル「老衰死：穏やかな死を迎えるには」	老年看護対象論の単元「高齢者の終末期医療」
VTR		浅井他	1年生	視聴覚教材の有用性を検討する	学生16名に，筆者らが作成したVTRを視聴してもらい，自記式質問紙調査を実施した。DVDの時間や内容の適切さに関する回答は統計的解析を行い，高齢者理解，重要と思う高齢者ケアに関する記述は内容分析を行った。	施設入所中のAさんの生活史と生活に関する半構造化的インタビュー（筆者らが作成）	1年時の科目をほぼ履修終了後
DVD		根岸他	1年生	看護学生が高齢者の日常生活をどのように捉えているのかを明らかにする。	高齢者の生活についての感想レポートを，文脈単位でコード化し，内容分析した。	高齢者の日常生活（筆者らが作成）	老年看護学概論1回目の講義
	演習	葛原他	2年生後期	視聴覚教材活用の効果について明らかにする	自由記述の事前課題レポートを課し，その自由記載内容から分析を行った。	模擬患者のコミュニケーション場面（筆者らが作成）	演習の前
		安川他	1年生後期	自作視聴覚教材の効用とその教授法について学生の反応から検討する.	看護学生47名に対し，映像に関する関心の有無とその理由，高齢者に対する関心度，映像全般に対する感想等の調査票を配布。内容の類似性によって整理し，共通する意味を表すカテゴリーを抽出した。	自宅で家族の介護をうけて生活している認知症がある101歳女性（筆者らが作成）	老年看護学概論の履修終了前
		木島他	4年生	作成した視聴覚教材の今後の活用に向けての課題を明確にする	筆者らが作成したDVDを学生4名に視聴してもらい，認知症が生活に及ぼす影響の理解，看護過程演習への活用の有効性，今後の改善点について，フォーカスグループインタビューを実施した。	実際の認知症高齢者の日常生活の様子（筆者らが作成）	老年看護学演習履修後

カテゴリーは【統合的な理解促進】【身近な存在として認識】【高齢者を取り巻く環境の理解】【看護【視聴覚教材活用のメリット】の4個に分類された.

サブカテゴリーは≪老年観の深まり≫≪倫理観≫≪認知症高齢者へのイメージ≫≪死の受容≫≪高齢者への興味・関心≫≪身近な存在≫≪高齢者介護の現状理解≫≪認知症高齢者を取り巻く環境の理解≫≪練習効果≫≪場面の焦点化≫の10個に分類された.

Ⅳ．考察

1．対象文献の動向

高齢者看護学領域における視聴覚教材に関する研究論文数は表1に示した通り，2005年以降に年1～2編発表されていた．2000年から介護保険制度，2012年から認知症施策推進総合戦略（通称オレンジプラン）が始まった．高齢者支援の対策の普及と相関してこの分野の研究もコンスタントに行われたのではないかと推察する.

発表年が古いものは映画やTVドラマが多く，徐々に自主製作DVDを使用した論文に移行してきた．阿部[4]は，既存の映像では，授業に関連した正確な内容は得難い．自主製作映像は，準備に多大な時間とエネルギーを費やす弊害について述べている．しかし，時間とエネルギーを費やしても，教育効果があるため映画教材から自主製作映像の論文数が増えてきたと推察

表３　高齢者理解への効果

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
統合的な理解促進	老年観の深まり	その人らしさ（1）（7）
		加齢による身体的特徴・衰退（2）（3）（4）
		高齢者の恋愛や性（3）（8）
		後世の世代への理解（8）
		次世代への委譲（3）
		健康・自立，生活に対する思い（8）
		これまでの人生の振り返り（3）（8）
		役割の重要性（8）
		自立度の高さ（4）
		結晶性知能の維持（4）
		高齢者自身の生き方・価値観（1）（2）
	倫理観	共感的理解（1）（4）（6）（8）
		尊厳の保持（1）（6）
		高齢者の立場に立ったものの考え方（1）（4）
	認知症高齢者へのイメージ	認知症の患者についてイメージできる（5）
		認知症高齢者を肯定的なイメージ（5）
		認知症高齢者の1つのイメージが明確化（5）
	死の受容	だれかに看取られて逝く（9）
		老衰で逝く（9）
		死への不安（3）
		限りある命の受容（3）（8）
身近な存在として認識	高齢者への興味・関心	心の若さ・思い（1）（3）
		社会的役割の重要性（3）（4）
		自分たちよりも長く生きている人（1）
		高齢者への興味や関心をもつ（2）（4）
		高齢者と関わってみたい（2）（4）
	身近な存在	自分の祖父母との置き換え（2）（4）
		子孫への思い（3）（4）
		高齢者の生活に対する理解（1）（2）
高齢者を取り巻く環境の理解	高齢者介護の現状理解	サポートの重要性（1）（2）（4）（8）
		介護方法（4）
		老々介護（4）
		危険な環境（2）
	認知症高齢者を取り巻く環境の理解	認知症患者の苦痛や家族の苦悩の理解（5）
		地域や介護サービスを利用することの意味を理解（5）
視聴覚教材のメリット	練習効果	自立・自律を促す関わり（5）
		言語的コミュニケーション技法（4）（6）（8）
		非言語的コミュニケーション技法（6）（8）
		反応をとらえる視点（6）
	場面の焦点化	語りの捉えなおし（8）
		限られた生活史情報から高齢者を理解する実践的な能力の育成（7）（8）
		認知症高齢者の個別性や多様性をいち早くとらえる（7）（8）
		得た知見をすぐに活用することで実習経験の統合につながる（7）（9）
		個から，多くの高齢者へ視点が広がる（3）

する．つまり，冒頭で引用した，「現実的な場面の提示ができる」視聴覚教材の教育効果の活用が普及した結果ともいえるのではないだろうか．

２．視聴覚教材の分類と視聴時期

講義での視聴覚教材の活用した多くのものは，「認知症高齢者」「高齢者の終末期医療」の理解など目的を明確にしたものであった．実施前後の教授法については，目的に添ったテーマの講義や演習を組み入れている構成であった．

演習での視聴覚教材の種類は筆者らが作成したDVDのみだった．さらに，視聴覚教材以外に模擬患者を併用し，場面の焦点化や反復練習できるといった視聴覚教材のメリットを生かした構成で行っているものが散見された．

阿部[4]は，視聴覚教材を活用した教育は「受動的」「情報量の多さ」などを挙げており，学生が理解したつもりになる学習錯覚を招く危険性を指摘している．それを回避するためには，教員のねらいと目的を明確にし，視聴覚教材をどのように活用するのか，他の学習方法との組み合わせ等について吟味していく必要がある．

３．高齢者理解への効果

高齢者理解を示す記述及び，視聴覚教材の効果を示す結果は，【統合的な理解促進】【身近な存在として認識】【高齢者を取り巻く環境の理解】【視聴覚教材活用のメリット】の４個のカテゴリーに分類された．【統合的な理解促進】【身近な存在として認識】【高齢者を取り巻く環境の理解】の３個のカテゴリーは，高齢者理解をもたらす視聴覚教材の効果を示すものだった．【視聴覚教材活用のメリット】のカテゴリーは，視聴覚教材活用による学習効果を示すものだった．

【統合的な理解促進】は，≪老年観の深まり≫≪倫理観≫≪認知症高齢者へのイメージ≫≪死の受容≫の４個のサブカテゴリーに分類された．≪老年観の深まり≫は，最も多く11コードだった．その内容は，身体的・精神的・社会的側面が含まれており，衰退面だけでなく成熟面も含まれていた．前述した太田1）の示した高齢者の生活全体を捉えるための視点からみても不足する点はないと考える．

≪倫理観≫は「尊厳の保持」「高齢者の立場に立ったものの考え方」などの３コードだった．

高齢者は，加齢とともに病気などをきっかけに，心身の機能低下をきたす．心身の機能低下により，身の回りの事が出来なくなれば，日常生活を維持するために，何らかの援助が必要になってくる．目黒[15]は，尊厳を保持するケアとは，患者をひとりの人間として尊重し，苦痛なく穏やかに生活できるよう支援することそのものであると述べている．「自立と依存のバランス状態にある」[1]高齢者を支援するうえで，倫理観を育む教育は必要不可欠である．臨地実習等，実際に高齢者と関わる前の事前準備として，重要な役割を果たしていると考える．

≪認知症高齢者へのイメージ≫は「認知症高齢者の肯定的なイメージ」などの３コードだった．正木[16]は「脳の障害によって症状は異なる様相を示すため，症状をよく理解し，かつその人の生き方や気持ちを十分にくみ取りながら，認知症を患いながらも豊かに生きることを支援することが認知症ケアの原則となる」と述べている．認知症高齢者は，言語で伝えたいことを伝えることが困難であったり，話している内容を忘れてしまったり，環境の変化からせん妄などの症状が出る場合がある．看護学生の多くは，生活体験の中で，高齢者と接する機会が乏しいこともあり，臨地において認知症高齢者とコミュニケーションをはかること，さらに，思いを汲み取ることは，難易度が高い．座学の段階から，認知症高齢者の方や周囲の人，取り巻く環境について，イメージが明確化する，肯定的なイメージが持てることは，「認知症を患いながらも豊かに生きること」を支える意義を見出すきっかけになりえると考える．

≪死の受容≫は「だれかに看取られて逝く」「老衰で逝く」「限りある命の受容」などの４コードだった．大田[1]は，高齢者は死を身近に感じているものの，切実感をもって考えているわけでもなく，死そのものよりも，最期の迎え方に不安を持っていることが多いと述べている．高齢者は人生の終焉のステージを生きている方々であり，いずれ訪れる死と，その時どのような最期を迎えるのかを意識していると考える．このような死との向き合い方は，老年期にある方々であるからこそとも言える．青年期～成人期が多くを占める看護学生に対して，高齢者の立場に立って，その人らしい最期を迎える意味を考えさせることはとても重要である．その観点から，高齢者の終末期ケアにおいて関心を向けてほしい内容が含まれていると考える．

【身近な存在として認識】は，≪高齢者への興味・関心≫≪身近な存在≫の２個のサブカテゴリーに分類

された．≪高齢者への興味・関心≫は５コード，≪身近な存在≫は３コードより形成された．近藤[17]は，現代の看護学生は，少子化によって周囲の大人から何かをしてもらうことに慣れて育った，他者とかかわらなくても簡単に情報が入手できるIT社会で育ってことから，積極性の低さおよびコミュニケーション能力が不足しているという見方もある．と述べている．このように，現代の看護学生は，希薄な人間関係形成になじんでいる．だからこそ，高齢者の方々を身近な存在と感じ，興味・関心を向けることができることは高齢者理解の入口に立てたともいえる．

【高齢者を取り巻く環境】は，≪高齢者介護の現状理解≫≪認知症高齢者を取り巻く環境の理解≫の２個のサブカテゴリーに分類された．≪高齢者介護の現状理解≫は「老々介護」「危険な環境」などの４コードから形成されていた．≪認知症高齢者を取り巻く環境の理解≫は２コードから形成されていた．小木曽[18]は，ICFの構成要素の１つである環境因子は，心身機能，構造，活動，参加の構成概念と相互作用すると述べている．つまり，高齢者の疾患に対する治療のエンドポイントを迎えた後には，心身機能の低下を補うための環境調整が重要となってくる．出来る限り今の状態を維持・向上させ，その人らしい暮らしを支えていくことが求められる．その観点から，高齢社会・環境において関心を向けてほしい内容が含まれていると考える．

【視聴覚教材活用のメリット】は，≪練習効果≫≪場面の焦点化≫の２個のサブカテゴリーに分類された．≪練習効果≫は「反応をとらえる視点」「非言語的コミュニケーション技法」などの４コードから形成されていた．竹田は，映像メディア（映像メッセージを視覚的に呈示する視聴覚メディア）の教育的特性のうちの１つとして，「再現性」を挙げている．映像メディアによって，１度きりの事象が，映像によって繰り返し再現されうる．これは，学習者へのフィードバック機能として用いられることもあると述べている．[19]高齢者とのコミュニケーションは，高齢者の聴覚・視覚・知的機能のコミュニケーション能力の状況で，難易度が変わってくる．これらの機能をアセスメントし，時にはタッチングやミラーリング等の非言語的コミュニケーションを活用していく必要がある．とは言え，ここまでのコミュニケーション能力は，看護学生が日々，臨地実習等で出会う人々と関わる中で，座学での学びを実践し，振り返りしながら，徐々に身に着けていくものであると考える．そういった面で，視聴覚教材の「再現性」は，高齢者の反応を捉えるように，事象の場面を提示しながら教授できるという面で有効であると考える．

≪場面の焦点化≫は「語りの捉えなおし」「限られた生活史情報から高齢者を理解する実践的な能力の育成」など５コードから形成されていた．このサブカテゴリーを構成しているコードの多くは，施設や自宅で生活する高齢者の映像を視聴した学びから得られている．これは，視聴覚教材の特徴を生かし，「多量の情報を瞬時に伝達」[4]し，尚且つ，教材として最適な場面を再度視聴することで，映像の高齢者の語りを捉えなおした結果ではないかと考える．この教授方法は，臨地実習等の実際の高齢者との関わりでは不可能であり，視聴覚教材の特徴を生かした結果と考える．辻は，視聴覚教材を実習場面での提示による，実習時の注意点の理解促進及び，実習の心構えを改めさせる効果について言及している．同時に，座学との組み合わせによる学習効果向上にも言及している．[3]今後も継続して臨地実習の制限が予測される．より一層，学内での「主体的・対話的，深い学び」にたった授業改善[2]が必要となってくるであろう．そういった意味でも，高齢者の多様性，取り巻く環境等の理解につながる視聴覚教材の活用方法は，他の学習方法との組み合わせも含め，今後も検討していく必要があると考える．

このように，視聴覚教材は，教員のねらいを明確にし，尚且つ活用の工夫次第で高齢者理解の効果が期待できることが示唆された．

４．本研究の限界と課題

本研究は，国内の文献に限定して検討していたため，検討文献数に限りがあった．海外の文献を検討する際には，その国の文化や高齢者看護の現状が影響すると推察され，これが本研究の限界であると考える．

また，高齢者理解への効果については，高齢者理解を示す記述及び，視聴覚教材の効果を示す結果を類似性に基づき分類したが，共同研究者間の検討であり，客観的な信頼性の判定までは至らなかった．

Ⅴ．結論

1. 高齢者看護学領域における視聴覚教材に関する対象論文数は９編であり，2005年以降に年１～２編

発表されていた.

2. 高齢者理解の効果は,【統合的な理解促進】【身近な存在として認識】【高齢者を取り巻く環境の理解】【視聴覚教材活用のメリット】であった.
3. 視聴覚教材の効果は,教員のねらいの明確化と工夫次第で高齢者理解を期待できることが示唆された.
4. 視聴覚教材の活用方法及び他の学習方法との組み合わせについて吟味する必要がある.

利益相反

本研究は文献的研究であり,倫理的問題は生じない.また,本研究には開示すべき利益相反は存在しない.

引用文献

1) 太田喜久子:老年看護学 高齢者の健康生活を支える看護,医歯薬出版;4-5,155-158,2012年
2) 文部科学省:平成29.30.31年改訂学習指導要領,https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm(最終閲覧2021年10月5日)
3) 辻義人:視聴覚メディア教材を用いた教育活動の展望―教材の運営・管理と著作権―,小樽商科大学人文研究,115;175-194,2008.
4) 阿部和厚:大学教育における視聴覚授業:特に医学教育を中心として,高等教育ジャーナル,1;190-208,1996.
5) 古藤泰弘:教材の種類・形態とその働き,「教材学」現状と展望 上巻,共同出版,東京;2008年
6) 馬場口喜子,田中正子,光木幸子:老人理解の学習効果―テレビドラマを用いて―,京府医大短紀要,第3号;175-179,1993.
7) 根岸貴子,内村恭子,大川尚子他:視聴覚教材による看護学生の高齢者の日常の捉え方―視聴後レポートの内容分析から,老年看護 第36回;39-41,2005.
8) 古城幸子,木下香織:高齢者理解を広げる映画教材の教育効果,新見公立短期大学紀要,第28巻;1-6,2007.
9) 安川揚子,木島輝美,大塚眞理子他:高齢者を理解するための自作視聴覚教材に対する学生の反応,札幌医科大学保健医療学部紀要,第13号;71-78,2011.
10) 久木原博子,安藤満代,吉良晴子他:認知症高齢者を理解するためのビデオ教材の効果,インターナショナル nursing care research,第12巻,第1号;161-169,2013.
11) 葛原誠太,室屋和子,野元由美:老年看護学演習における視聴覚教材活用の効果,産業医科大学雑誌,35(2);173-182,2013.
12) 木島輝美,安川揚子,高橋順子他:生活機能に焦点をあてた認知症高齢者の視聴覚教材の作成と看護過程演習への活用に向けての課題の検討,札幌保健科学雑誌,第3号;35-42,2014.
13) 浅井さおり,小泉未央,沼里礼美他:看護学生の高齢者理解のための視聴覚教材の評価:生活史インタビューで構成した試作教材の有用性,獨協医科大学看護学部紀要Vol.9;21-33,2015.
14) 長尾匡子,山本裕子:高齢者の終末期医療や老衰死についての看護学生の認識,老年看護学,25(1);132-138,2020.
15) 目黒斉実:認知症看護の基本的な考え方,亀井智子,認知症高齢者のチーム医療と看護,東京都,中央法規出版;135-137,2017年
16) 正木治恵:認知症看護の基本的な考え方,亀井智子,認知症高齢者のチーム医療と看護,東京都,中央法規出版;3-4,2017年
17) 近藤浩子:最近の学生の特徴を踏まえた指導方法,牛久保美津子,地域完結型看護をめざした看護教育,東京都,メジカルフレンド社;112-118,2019年
18) 小木曽加奈子:ICFの概念とその活用,小木曽加奈子,地域包括ケアにおける高齢者に対するシームレスケア―ICFの視点を活かしたケアプロセス,退院支援,退院調整に焦点を当てて―,東京都,学文社;41-44,2019年
19) 竹田眞理子:映像の認知とメディア利用の効果,改訂 視聴覚メディアと教育,佐賀啓男,東京都,樹村房;112-140,2012年

受付日:2022年1月20日　受諾日:2022年5月15日

【Reference】

Literature review on the effects of audio-visual educational materials for understanding the elderly

Fuyu MISHIMA[1)]　Akiko SUZUKI[2)]

Abstract

Gerontological nursing subjects elderly patients at their final stages of life and requires a proper understanding of the diversities and backgrounds of their lives and the surroundings of their life stages. The recent COVID-19 outbreak demands us to change the conventional training methods for nursing students, and the effect of audio-visual educational materials was investigated in this study as a candidate for an alternative training method in understanding the elderly. As a result of literature review, the following four categories of “promotion of comprehensive understanding,” “recognition as a familiar being,” “understanding of circumstantial influences surrounding the elderly,” and “merits in using audio-visual educational materials” were identified in the investigated literature. Subcategories were also extracted, including “deepening in the image of elderly,” “image of elderly with cognitive impairment,” “interests or concerns toward elderly,” “a familiar being,” “understanding current situation surrounding gerontological nursing,” “training effects,” and “scene focusing effects.” The literature review results suggested that the effective use of audio-visual educational materials would promote the level of understanding toward the elderly according to the teacher's intentions or the ways he/she used the materials.

Key words：nursing education, elderly, understanding, audio-visual material

1) Faculty of Human care at Numazu, Department of Nursing, Tohto University
2) Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Nihon Institute of Medical Science
E-mail: fuyu.mishima@tohto.ac.jp